地名の由来と史跡と文化財

三和地区（市西編）

三和地区武士の建市神社

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会会員）

令和２年１１月編集・製作

まえがき

人類は、今から７００万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約１０万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前１万４千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続き木であり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちはら」にも人が住み始めて３万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（ＨＵＴＩ）「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社と思われますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社と思われます。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていますが、水稲耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「三和地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。

市原郡内の三和地区の地名の由来

千葉県の地名の由来

千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は７世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老２年（７１８年）に上総国から４郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語捨遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

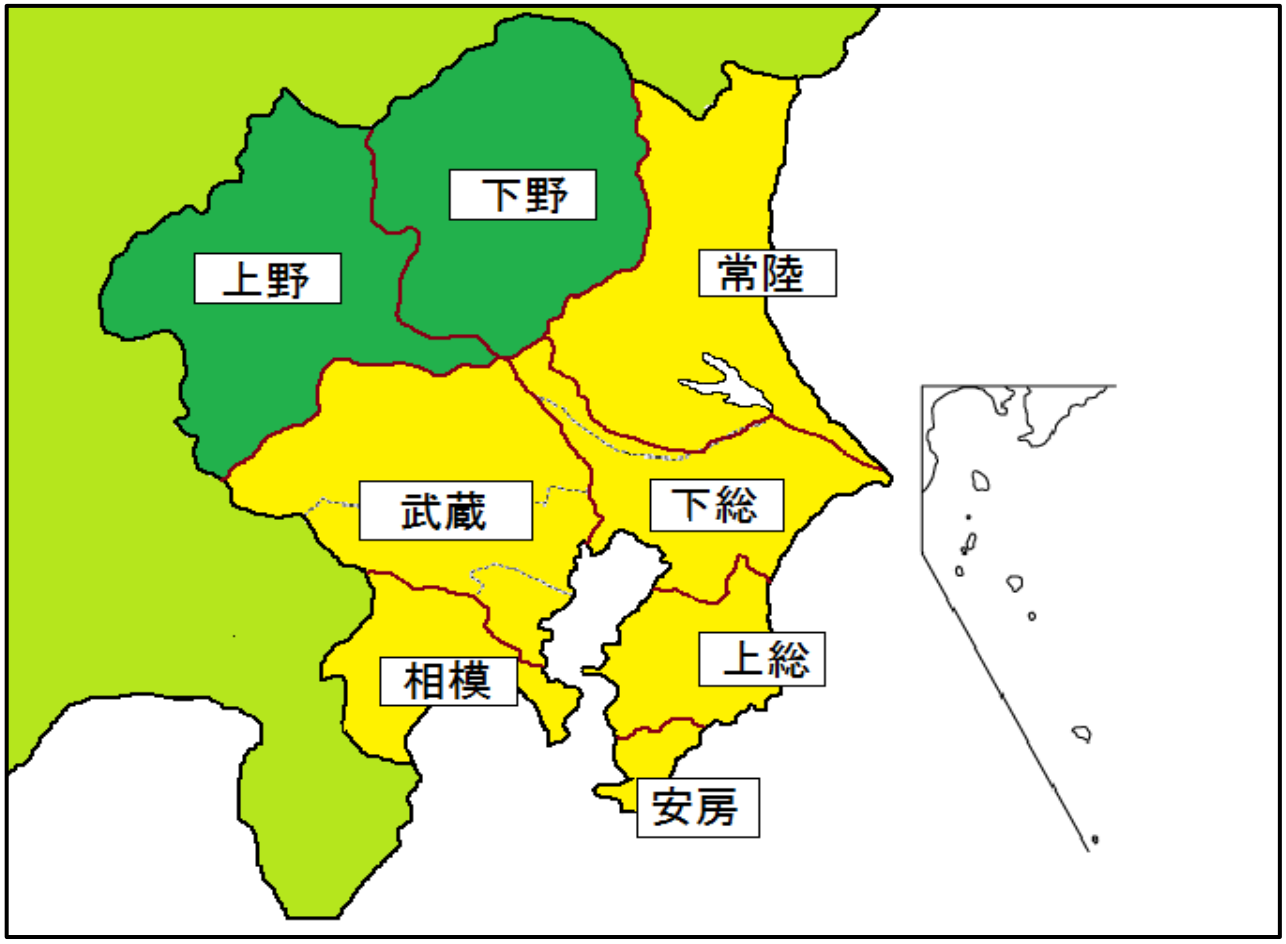
なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。

上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の１１郡がある。

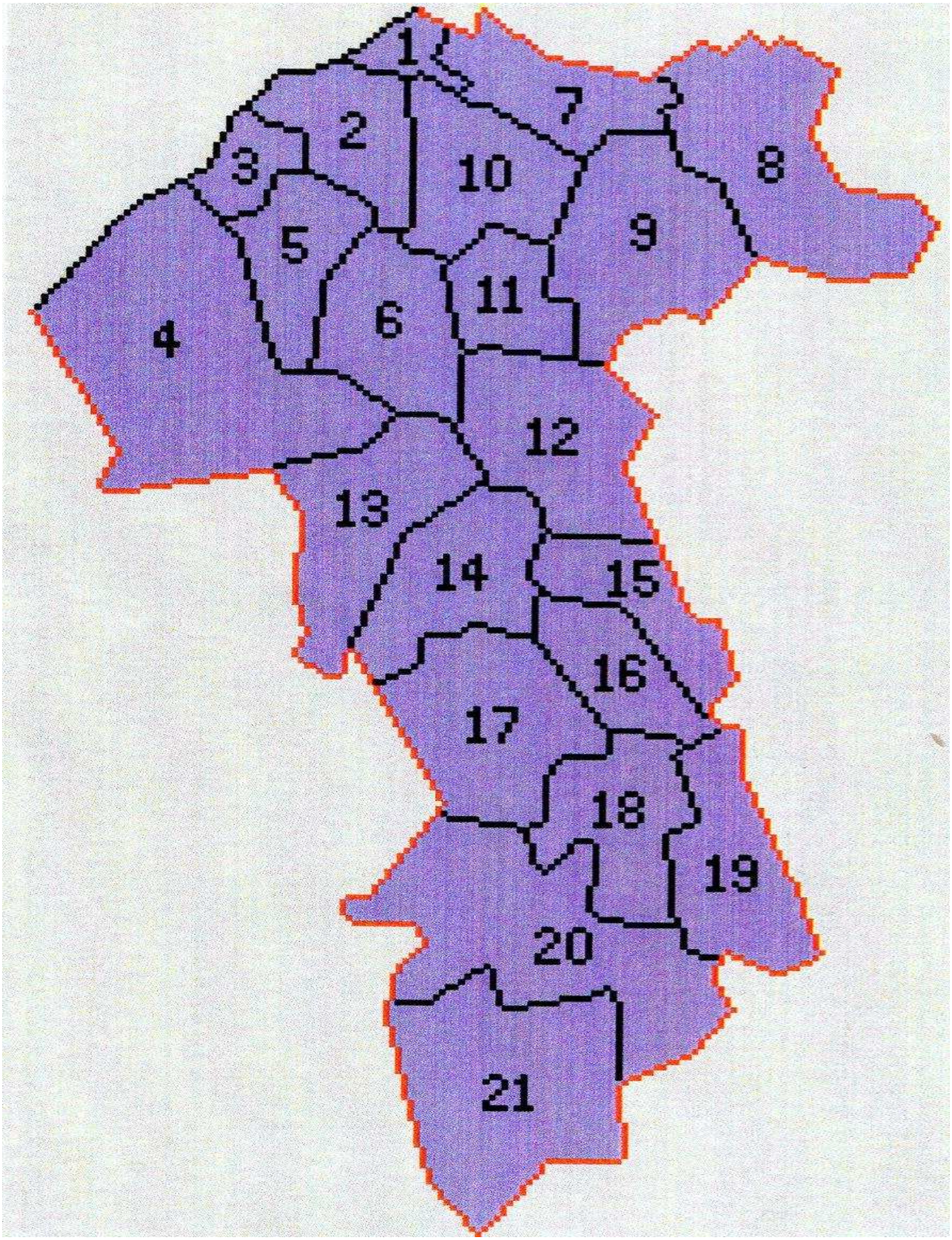
下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の１１郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の４郡で国造りがされた。

市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の６郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原

市原市の地区別地図



町村名　1・八幡　2・五井　3・千種　4・姉崎　5・東海　6・海上　7・菊間
8・市東　9・湿津　10・市原　11・市西　12・養老　13・戸田　14・牛久
15・内田　16・鶴舞　17・高滝　18・富山　19・平三　20・里見　21・白鳥

市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の６郷

１・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

２・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治２年（1659 年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

３・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な涌泉があることから命名された地名と思われる。

４・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

５・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

６・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

市西地区　（相川・海士有木・中谷原・三又・大坪・山倉・福増・新堀・武士・小野山・西ヶ崎）

概説

この地域の沿革については不詳ですが、縄文時代中・後期の貝塚である山倉貝塚からは住居跡等が発見されている。古墳時代には、地形上養老川流域の平野であることから上海上国造の支配下であったと思われ、その頃に築造された山倉１号墳からは人物埴輪や円筒埴輪等が多数発掘され、有力豪族の存在が考えられる。

大化の改新による国府設置に伴い上総国市原郡に属した。

この地区の地名で知り得る最古のものは、延貴年間（平安時代前期）に式外の宮社として定められた「建市神社」による「武士」です。郡雄割拠時代には各武人の治下であり、天文２１年（１５５１年）に里見義尭によって攻略された「二階堂実綱」が居した蟻木城及びその供養塔であると思われる「石造十三塔」が海士有木に残っている。この蟻木城は、その後椎津中務少輔が支配したが、天正３年（１５７５年）に里見義弘によって落城されたという。また、現在の市西小学校地にあった「小野山城」は蟻木城落城後、北条綱成による築城と言われ、北条氏の武将であった「小野修理亮」城主であったが、天正１８年（１５９０年）に豊臣の部下である浅野長吉によって落城したと言われている。

明治維新前には、ほとんどの地が諸旗本の采地であった。

明治元年（１８６８年）房総知県事柴山文平の支配となり、同年１２月に菊間藩に駿河国沼津城主水野忠敬が転封され、相川（鶴牧藩領）を除いてこの所領となり、同年４月廃藩置県により木更津県、同６年に千葉県、同年１１月に郡区町村編制法により千葉市原郡役所に属し、同１７年市原郡市西村（市原村西広を含む）となった。明治２２年（１８８９年)、市町村制施行に伴い、現在の地区から成る市西村が成立し役場を海士有木に置いた。市西の地名の由来は、市原郡の中部を市西荘と称したことに由来すると言われ、江戸時代前期の海士有木長谷寺の鐘銘に「市西荘」と記されていることからも窺がえる。

昭和３０年の町村合併促進法により、市西村、養老村、海上村が合併し、三村和合の願いを込めて「三和町」と名付けた。

相川　（あいかわ）　神社・寺院・文化財・史跡　　石神神社・普門院（真言宗豊山派）

江戸期は相川村。地名の由来は「あい（間）・かわ（川）」で、養老川の曲流の東西を挟まれた地勢による。

石神神社

所在地　　市原市相川９８番地

宮司　　早乙女洋子

祭神　　倭建命

創建時期　　不詳

由緒・伝説　不詳

説明　この神社は、養老川右岸に鎮座し、
相川の産土神で旧村社です。

相川石神神社の鳥居と奥の本殿

石上神社の本殿

石上神社の右側

出羽三山の供養塚

普門院　（しんもんいん）　　真言宗豊山派

所在地　　市原市相川９３番地

創建時期　　不詳

本尊　　不詳

住職　　川俣　弘潤

由緒・伝説　不詳。市原郡四国八十八か所霊場
１１番札所となっている。

普門院の本堂は自治会の会館と併用

本堂裏にある墓地。宝篋印塔などかなり古い墓石がある

海士有木　（あまありき）　神社・寺院・文化財・史跡　　日枝神社・八坂神社・大宮神社
泰安寺（顕本法華宗）・長谷寺（真義真言宗）・蟻木城・石造十三重塔・小野山城址

明治７年（１８７４年）に起立。もとは海士村と有木村。海士村は、海辺・海とも書く。
地名の由来は、古代海士族と関係があるともいわれている。県内の「あま」とつく地形は水辺（川・海）の側の崩壊した丘陵、または山となっていることから、「あば（奪）・み（水）」の転訛で、水辺の地崩れ地という意味か。
有木（蟻木）の地名は、戦国期からあり、戦国期末期二階堂實綱が拠した蟻木城跡がある。
地名の由来は、「あらき（新懇）」の転訛。一説に「当地にある長谷寺の御本尊を作った稀代の霊木がある」という意味で「有木」にした言う説もある。

本殿前の狛犬と一間社流れ造りの本殿

日枝神社　（ひえじんじゃ）
所在地　　市原市海士有木１４７番地
宮司　　早乙女洋子
祭神　　大己貴神
創建時期　　文正２年（１４６７年）に創建。
由緒・伝説
説明　　境内に子安神社が祀られている。
　　村社八坂神社の末社。

神社入り口にある鳥居と参道

本殿を右側から撮影

本殿前に左右の狛犬と本殿（保護建屋の中）

八坂神社　（やさかじんじゃ）
所在地　　市原市海士有木１５６６番地
宮司　　早乙女　洋子
祭神　　素盞嗚尊
創建時期　　文正元年（１４６６年）に創建。
説明　　尾張国津嶋神社の霊を移し氏神として祭祀。
　　もとは牛頭天王と称した。
　　末社に相川の石神神社がある。

２つの鳥居がくぐり本殿へ

保護用の建屋の中に本殿が納まる

参道入り口の鳥居と奥に見える拝殿

大宮神社　（おおみやじんじゃ）
所在地　　市原市海士有木１７１３番地
宮司　　早乙女　洋子
祭神　　大己貴神
創建時期　　文政２年（１８１９年）に八坂神社の境外末社として創建された。
説明　　後土御門天皇の頃に、出雲大社に霊を分祀し、大宮大権現と称した。
境内には子安権現、富士塚の浅間神社が祀られている。

拝殿とその前の守り神の狛犬

右から拝殿と幣殿そして本殿

享和３年に奉納された手水鉢

大悲山長谷寺　（だいじさん　ちょうこくじ）　（真義真言宗）
所在地　　市原市海士有木１６４３番地
創建時期　　寛元２年（１２４５年）
本尊　　不詳
住職　　中村　元信
由緒・伝説　　行基がこの地に来た時に、６尺余りの大石があり、それを抱えるように楠の大木があった。行基がこの周りを歩いていると老人が現れ、「この木で尊像を彫ればご利益があるだろう」と言い消え去った。行基はお告げを受け刻む像の姿を一心に念じた。すると翌日木に自然と菩薩の姿が現れていたので、稀代の霊木とたたえた。これを行基の作として御本尊としたという。地名の「有木」はこの霊木を意味しているという。
長谷寺は元「大悲山自然寺」であったのを、平将門が大伽藍や五重塔を造立し「関東豊山

長谷寺」と号したという。

長谷寺の本堂正面

寺院入口に建つ寺標の石柱

歴代住職の墓地と観世音菩薩

海士山泰安寺　（かいしさん　たいあんじ）　顕本法華宗

所在地	市原市海士有木１５８０番地
創建時期	室町期
本尊	不詳
住職	窪田　哲正
由緒・伝説	泰安寺は日安上人（1450 年～1544 年）により法華経を広めるために創建された。上人は 85 歳の入寂まで、興亡転変する戦国の世で、妙法公布の日々を送られた。泰安寺は、南総と上総を結ぶ街道の要所にある蟻木城の一郭に位置していたため、小田原北条氏と房総里見氏のたびたびの争奪戦のさなか２世の日円の後に一時廃絶した。その後３世日精により中興開基され、明暦２年（1658 年）に本尊・釈迦像を建立。生徳元年に本堂再建され、その後江戸末期ごろに本堂内宮殿、諸尊大営繕等、三門を興隆した。

歴史を感じる泰安寺本堂正面。

入口に建つ２階建ての山門

本堂の入り口の扁額

入口右側の寺標の石碑

本堂の左側面を撮影

歴代住職の墓地

市原市指定文化財の石造十三重塔

市原市指定文化財　泰安寺　石造十三重塔　（昭和４３年４月２５日指定）

石塔の高さは３，３ｍで、最下部の基壇は安山岩で複式反り連弁の彫刻を施しています。基礎石は花崗岩で高さ３４ｃｍ、幅６５ｃｍ、燈身は基礎石と同じ材料で（上部の相輪部は失われ、安山岩製の五輪塔の空風輪部を補修されている）高さ３７ｃｍ、幅３７．５cm 四面に月輪を陰刻し、中に薬研彫りで金剛界四佛を梵字で表しています。その上に基礎と同質の１３枚の笠石がのっている関西式の様式で、造塔時期は南北朝中期以前で、後に北条氏が関西から供養塔として持ち込んだと思われる。中世蟻木城の武将の供養塔の可能性と考えられる。元来は真言密教の金剛界四仏の供養塔であり、真言宗の題目が刻まれているが、どう言うわけか顕本法華宗の泰安寺の管理となっている。（住職の弁）

里伝によると、江戸時代当地を知行していた旗本の永井氏が江戸屋敷に運んだが、不吉なことが起きたため八幡の浜に打ち捨てたという。そこで当寺で「法華経」祈念で安隠をしたと言われている。

市原市重要文化財指定の案内看板

市指定重要文化財の石像十三重塔

蟻木（有木）城址　（ありきじょうし）

所在地　　市原市海士有木

築城時期　　天正４年（１５７６年頃）（安土桃山時代）

築城主　　北条氏家臣の二階堂實綱により築城

説明　　蟻木城は文献から、天正５年（１５７７年）の「里見義弘書状」（吉川金蔵氏所蔵文書）では前年に北条勢力が上総に侵入し、蟻木城を築造し配下の椎津氏を置き、下総・相模の兵を入れて守備している状況が記されて、里見氏としてはこれを攻略するために、上杉謙信の関東出陣を懇願している。また、江戸時代に書かれた「管窺武鑑抄」には、天正３年（１５７５年）に里見義弘により蟻木城が落城し、城主「中務少輔」と弟の椎津帯刀」が討ち死にしたと書かれている。

蟻木城の歴史的経緯ははっきりしているが、台地上の宅地化が進んでしまいその形状ははっきりしない。かつては「本城」「中城」「城手の下」という地名が存在しているので、中規模以上の城郭であったと思われる。

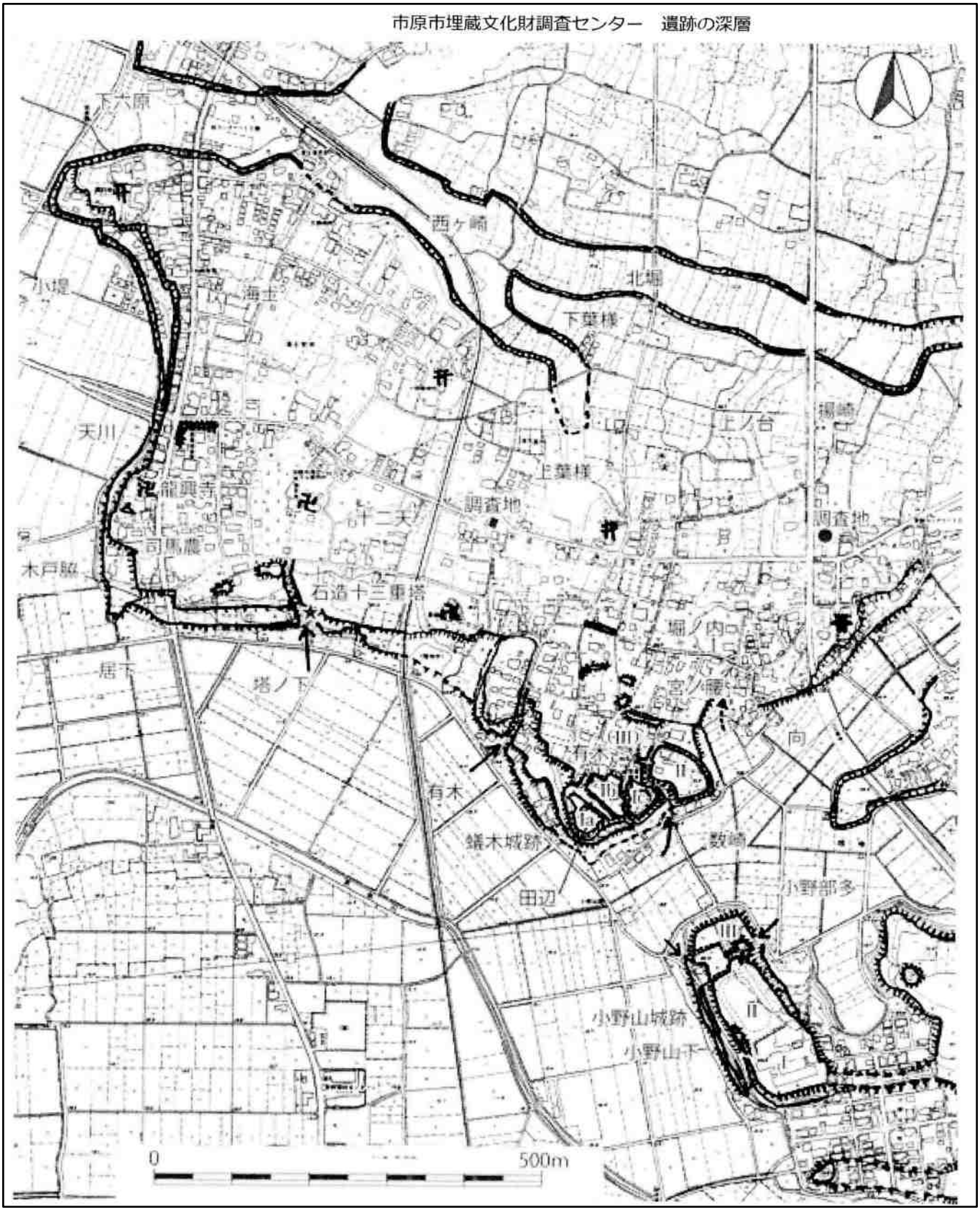
台地の南端にあたる田郭と呼ばれている部分が主郭と思われ、堀を挟んで北側が２郭となる。１郭北側の堀は浅いながらもその形状は残しており、２郭北側の堀は埋められているが、切岸が延びているのが分かる。

これに付設、東側には八幡神社のある郭がある。やや独立性の高い郭です。八幡神社の周囲には土塁が巡らされているが、これは神社を建築に際して造られたものか。その北側や西側の土手は城塁の名残と思われる。しかし、堀は埋められております。神社北東側の下にある切通しの通路も、かつては堀切の名残と思われる。

中枢部の遺構のほかに、更に外郭部と思われる遺構が台地の中ほどのＡの屈曲した堀の名残りと

思われる堀の跡や土塁や土手が部分的に残っている。その東側にＢの土塁の残りが見られることから、その東側の台地の切れ込んだ辺りまで、折れながら延びていると思われる。
蟻木城は、北条氏が里見氏に対する前線基地として築城しただけあって、幅広のしかも複雑な折れを堀を伴った城郭であった。

蟻木城の縄張り図



小野山城から見た蟻木城跡

八幡神社周囲の土塁

八幡神社背後の土塁跡

田郭の堀切跡

２郭の土塁と思われる部分

Ｂの部分にある土塁跡

Ａの部分に残る土塁跡

小野山城址　（おのやまじょうし）

所在地　市原市海士有木小野山

築城時期　天正 18 年（1590 年）安土桃山時代

築城主　小野修理亮（北条氏家臣）

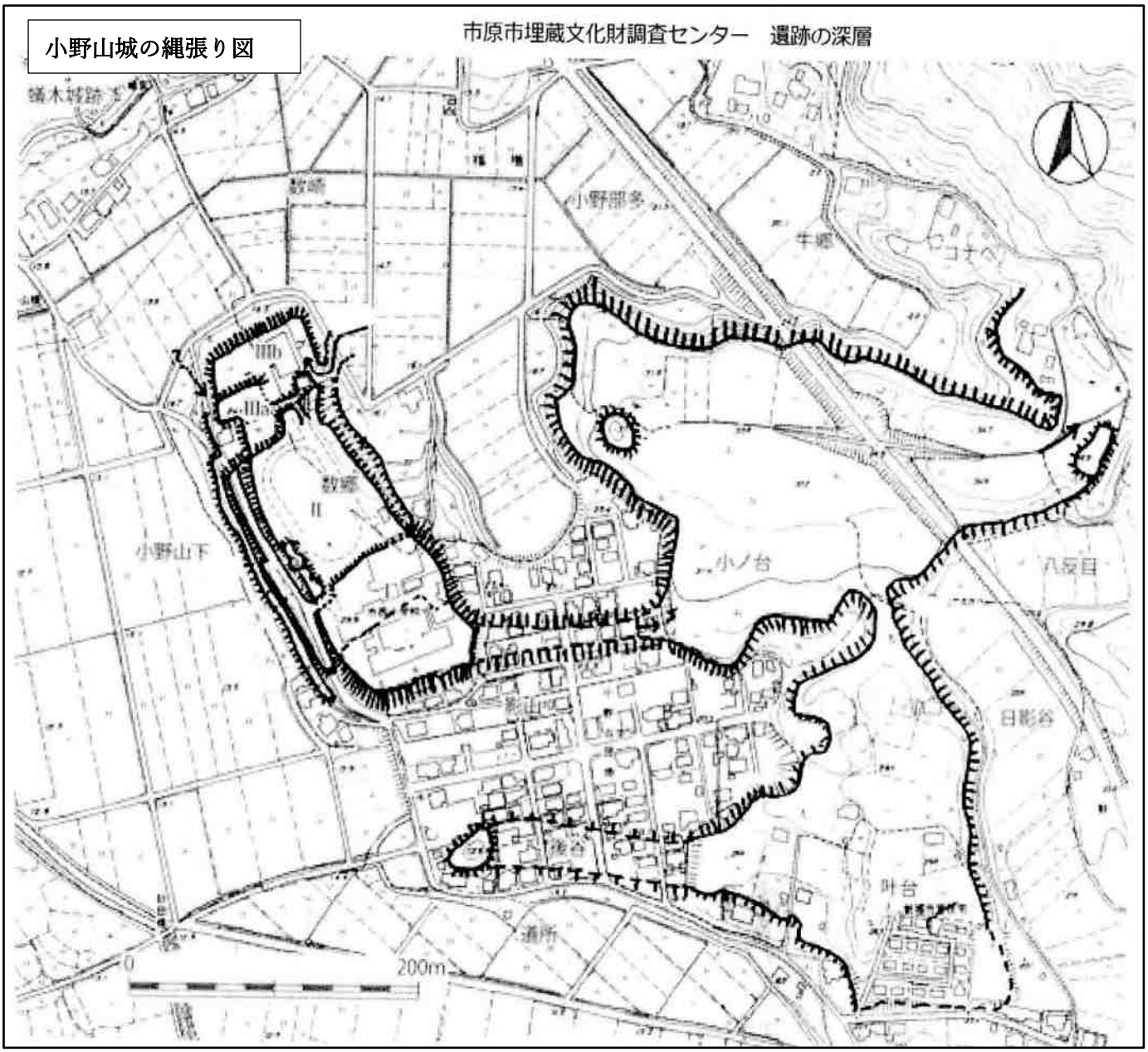
説明　小野山城は、養老川の堆積平野に突き出した比高２０ｍほどの独立台地上にあった。現在は市西小学校が建っており、蟻木城から東南に９００ｍほどあり、蟻木城の支城と思われる。

この城は北条氏方の城で、家臣の「小野修理亮」が守っていたが、小田原の役に際して豊臣方の浅野長吉により落城されたという。城址はほぼ独立形状の台地であり、かなり広い空間があり、蟻木城から見える位置にあり、地形的にも城を建てるには良い場所と思われる。

現在小学校の校舎とグランドがある場所が主郭で、比高２０ｍの長方形（80ｍ×２４０ｍ）に配置され、北側の一段低い所が２郭、３郭は蟻木城側に建っている。西側の養老川の堆積平野寄りには、犬走り状の細長い郭が数段存在している。以前には東側にも台地に並行して堀切が認められ、北東側から３画への虎口が存在したと思われる。

蟻木城と小野山城の最短距離は約１７０ｍほどですが、間には小谷からの小川が流れており、付近は湿地帯であったので、直接の連携はやや困難と思われる。

小野山城の縄張り図



蟻木城から見た小野山城跡

小野山城跡の近景。跡地には市西小学校が建っています

大坪　（おおつぼ）　　神社・寺院・史跡・城址　　諏訪神社・大坪山龍興寺（曹洞宗）
福楽寺（真言宗豊山派）・大坪城

江戸期は大坪村。地名の由来は「おお（美称）・つぼ（臺）」で、凹んだ土地を指したもの。

諏訪神社　（すわじんじゃ）

所在地　　市原市大坪 636 番地

宮司　　早乙女　洋子

祭神　　建御名方命

創建時期　　長禄 3 年（1459 年）

由緒・伝説　　旧村社で、もと諏訪大明神と称した。長禄 3 年に信濃国諏訪神社を遷し氏神として奉った。永正 17 年（1520 年）に出雲国大社を分祀。弘治 39 年に京都北野社を分祀。明治 19 年 1886 年）に大宮神社（大己貴命：字金井）を合祀。明治 41 年（1008 年）天満宮（菅原道真：字小堤）を合祀した。

大坪諏訪神社の本殿の建物

参道入り口の鳥居と狛犬、本殿

本殿正面入口と諏訪神社の扁額

稲荷大明神の社。

出雲国社の入り口の鳥居

富士浅間講の供養塚

北野社・大宮神社・他の祠

大坪山龍興寺　（おおつぼさんりゅうこうじ）　曹洞宗

所在地　　市原市大坪 210 番地

創建時期　　室町期（16 世紀頃）

本尊　　不詳

住職　　児玉　昌広

説明・伝説　　室町期に創建されたと思われ、蟻木城や小野山城に関連した寺院と思われる。境内に室町期の五輪塔の一部が残されている。

龍興寺の本堂正面

本堂正面と入口の扁額

10 体以上の子育て地蔵

かなり古い宝篋印塔の石仏

福王山福楽寺　（ふくおうさんふくらくじ）　真言宗豊山派

所在地	市原市大坪 340 番地
創建時期	南北朝の室町期と思われる
本尊	不明
住職	田中　譲二
説明・伝説	大坪城主の大坪慶秀の菩提寺と言われ、創建時期は室町期とですが、江戸期には市原郡四国八十八か所霊場の 17 番の霊場になっている。

福楽寺の本堂正面

福楽寺の左側を撮影

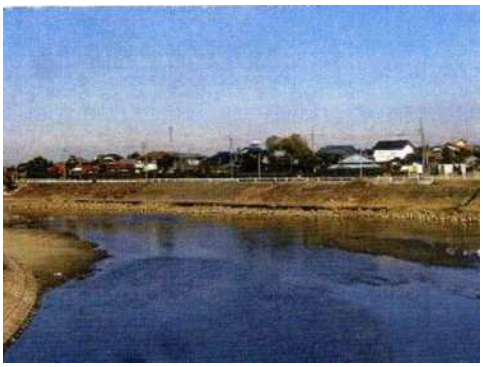
本堂正面入り口と寺名の扁額

大坪城跡　（おおつぼじょう）

所在地	市原市大坪字坪内
築城時期	南北朝の室町期
築城主	大坪　慶秀
説明	養老川を望む大坪の集落が、かつての大坪城の跡です。現在では集落内部は宅地化が進み、明確な遺跡、遺構は見られない。集落の中心部にある福楽寺は、

城主の大坪慶秀の菩提寺であったという伝承があります。大坪慶秀は、南北朝・室町時代の馬術の名手で、大坪馬術の祖と言われており、幼名は孫三郎、名は広秀・有成、通称は左京亮・式部大輔。出家後は道禅と号した。足利義満・義持の馬術の師となった。
大坪城は、養老川を臨む地形と集落の周囲が水田地帯であったと想像すると、かつては沼澤地であることから要害地形としてふさわしく、城を築くに適していた場所と思われる。
また、養老川の水運を監視するには便利な場所でした。集落の周辺を見ると水田地帯より若干高くなっている土手が見られ、これはかつて城塁としての名残りと思われる。
また、その下を通っている水路が水堀を改変したものと思われる。現状では城址そのものが集落化していますが、集落そのものを取り囲むような城郭と思われる。

北側の堀跡と思われる部分



養老川越に城址方向を撮影

武士　（たけし）　神社・寺院・史跡・文化財・城址　　鹿島大明神（建市神社）・法泉寺（天台宗）
木造聖観音菩薩及び二天立像・武士城跡

建市・武子・竹子とも書く。江戸期は武士村。地名の由来は、当地に鎮座している建市神社（現鹿島大明神）にちなむという。社は火災により遷宮しており以前は北にある大明神山の中にあったという。建市神を祀ったのは古代民族・高市氏（たけちし）と考えられており、当地に移住し祖霊を祀ったのが当社で、このことから地名になったという。
「たき（滝）・ち（処）」で、崖地・急傾斜地・浸食地を指したものか。または「たき（滝）・し（浸食地・冠水地」の転訛で、崖地・急傾斜地・浸食地で冠水しやすい土地を指したものか。

建市神社　（現鹿島大明神）（たけちじんじゃ）

所在地　　市原市武士字内神戸 204 番地
創建時期　　元慶８年（884年）に「上総国・正六位上建市神社・従５位下」と記録されている。
祭神　　建市大明神
宮司　　早乙女　洋子
由緒・伝説　男千本。旧山田郷社。現在鹿島神社に合祀。元慶中期に創立、延喜中式外の宮社と定められた。

建市神社の入口鳥居と拝殿

元は建市大明神で、元宮は大明神山の頂上にあったが明治初年に社殿を焼失した。それを機に集落に遷座していた鹿島神社に御霊を移したという。明治 15 年（1882 年）に大宮神社（字大宮戸：大宮姫命）を合祀、同 44 年（1911 年）に日宮神社（字日宮辺田：大日霊命）を合祀。現在武士神社本来の御祭神は不明ですが、須恵国造の一族である高市氏が祖神を祀ったのではないかと推測される。この地には古墳も多い。旧鎮座地の境内には円墳があり日本武尊が東征の際に、里の良民が尊を警護し奉ったことに感謝し、この塚に到着して良民を見たいと

いうことから「人見塚」と呼ばれているが、古墳の構築年代は６世紀初頭と制定されいる。
また、江戸期にはこの神社は盗人の神として知られ、盗みをして役人から逃げるのに大明神山に隠れると神が守ってくれたとの言い伝えがある。

建市神社拝殿の正面

建市神社本殿を右側

子安神社の鳥居と祠

拝殿前には左右に狛犬

見ざる言わざる聞かざるの石仏

大天狗・不明・小天狗の祠

鹿嶋山法泉寺　（かしまさんほうせんじ）天台宗

所在地　市原市武士 159 番地
創建時期　鎌倉時代と思われる
本尊　不詳
住職　石井尭栄
由緒・伝説　以前は武士城が築かれており、その後に法泉寺が創建されたか。本堂内に市原市指定文化財の木造聖観音菩薩像と、二天立像が安置されており、毎年８月 17 日に御開帳される。
境内にはスダジイの巨木がある。また、俳人の嶋野封躰の墓があり、江戸時代に活躍をしたと言われている。

法泉寺の本堂と文化財の説明看板

境内の周囲には多くの墓石

嶋野家代々の墓地

法泉寺のスダジイの巨木

木造聖観音菩薩・二天立像　（市原市指定重要文化財）（平成６年３月に指定）

木造聖観音菩薩は、像高８１・６ｃｍの広葉樹を材にした一木像です。量感を抑えた肉どりや、浅く数少ない衣文に、平安時代後期の伝統を受け継ぐ作風が見られます。

像の底部には、鎌倉時代の建長８年（1256 年）の紀年銘と「武士郷　観音」との墨書があり、確実な製作年代がわかる資料として市内最古のものです。また、この時期に「武士郷」が存在したことを示す点など、資料的価値が高く貴重なものです。

二天立像は、広目天と多聞天で、それぞれ像高６０・５ｃｍと６０・３ｃｍをはかります。ともにヒノキの一本割矧造で、動きが少なく、怒り憤る身振りや表情を抑えた姿は、聖観音菩薩とは異なる平安時代後期の特徴を表しています。製作年代は 11 世紀中ごろと推定される。（説明看板より）

多聞天（左側）木造聖観音菩薩（中央）広目天（右側）令和２年８月 17 日撮影）

武士城跡

所在地	市原市武士字堀之内・腰巻
築城時期	戦国期、
築城主	不明ですが、武田氏に関連した武将の城か
説明	武士の法泉寺の周囲は切岸状の土手となっており、古い墓石が多くの残っています。付近には、堀の内、腰巻、番場などの地名が残っている。

しかし、その旧場は明らかではないが、法泉寺のある場所が主郭ではないかと思われますが城館がここだけの単郭の物であったか、あるいは周囲に城域を広く持っていたかは不明です。寺院の西側には長く伸びた台地Ａがあるが、この土手も城塁形状をしている。あるいはここにも城の付属施設が置かれていたと思える。

法泉寺の東側の切り通し

法泉寺の北側の土手、土塁の跡か

新堀　（にいほり）　神社・寺院・文化財・史跡・城址

八幡神社・四天王山法光寺（日蓮宗）・新堀城跡

南北朝期は新堀郷。江戸期は新堀村。

地名の由来は、「にいはり（新墾）」の転訛で、新開墾地を指したもの。

新堀八幡神社の拝殿正面

八幡神社　（はちまんじんじゃ）

所在地　市原市新堀字日吉山 1366 番地

創建時期　治承４年（1180 年）

祭神　誉田別命

宮司　早乙女　洋子

由緒・伝説　旧村社。元は八幡大菩薩と称した。創建年代は不詳ですが相州鎌倉八幡宮の霊を勧請したという。治承４年に源頼朝の祈願があり社殿創建。宝暦９年（1758 年）に焼失。同 10 年に再建された。境内の山王権現は、社の側に小馬落ちと呼ばれる場所があり、その下に馬場があった。八幡宮は字引ケ谷にあり、両者とも村から見て東北東に鎮座している。

天保４年頃より様々な不思議なことが起きた。明け方氏子が馬のための草刈りに来たとき、小馬落ちに差し掛かると繁みから一人の老人が現れ、火災に気を付けろと注意したという。村人はご神託と信じ、以後火の元に気を付けたため大火は免れたという。天保の飢饉の時には、御給米の願いを出したが、なかなか聞き入れられず困っていると、八幡神が役人の夢に出て現状を告げたため、村は救われたという。

神社の入口と鳥居と奥に拝殿

本殿を裏側より撮影

四天王山法光寺　（してんのうさんほうこうじ）（日蓮宗）

所在地　　市原市新堀１３１７番地１

創建時期　　慶長２年（1597 年）に本成院日念聖人によって開山

本尊　　不詳

住職　　中島海解

由緒・伝説　　法光寺は、慶長２年江戸創成期に本成院日念聖人によって開山された。法華経守護の四天王である東方持国天・西方広目天・南方増長天・北方毘沙門天の名を掲げて、日念聖人が精力的に布教活動を行った記念碑的寺院です。日念聖人の開山になる兄弟寺院が、市原市内に４ヶ寺現存しています。本山に次ぐ「中本寺」の格式により、末寺１ヶ寺をもっていますが、明治１６年に火災により三門を残し焼失してしまいました。その後、明治２３年に再建されました。

法光寺は、特に昔ながらの本物の甘茶を出すただ一つの寺院として「甘茶寺」の名で知られている。

四天王山法光寺の山門と参道

あま茶寺法光寺の本堂全景

本堂入り口

釈迦様の石像と建屋

鬼子母神を祀る堂

甘茶の由来の案内看板

祈祷所　三十番所の建物

新堀城跡　（にいほりじょうあと）

所在地　　市原市新堀字塙台

築城時期　　戦国期と思われる。

築城主　　武田氏の支城で、家臣が城主

説明　　新堀城は、新堀地区の中心部近くで鶴岡病院の東南２００ｍほどの所にある単郭の居館です。比高２～３ｍほどの微高地で、周囲は水田があり、かつては水堀だったと思われる。

微高地の西側にも四方１００ｍほどの微高地がある。こちらも城に関連した施設があったと思われる。この微高地の下には小さな神社がある。城主は明らかではないが、佐是城を中心とした支城網の一つで、武田氏によって築かれたものと思われる。

法光寺西側にある台地の館跡

福増　（ふくます）　神社・寺院・史跡　　白山神社・福増山本念寺

福升とも書く。江戸期は福増村。奈良期の武士廃寺跡（推定地）などがある。

地名の由来は、「ふけ（渕）・ます（高くなった所）」の転訛で、湿地の側の丘陵を指したものか。

福増　白山神社　（しろやまじんじゃ）

所在地	市原市福増字宮ノ越８５１番地
創建時期	不詳
祭神	白山姫命
宮司	早乙女　洋子
由緒・伝説	旧村社、元は白山大権現と称した。大正２年（１９１３年）に栗島神社（字揚ヶ橋：少彦名命）を合祀。

福増白山神社の本殿と狛犬

白山神社の参道と鳥居

境内にある浅間神社の鳥居

馬頭観音などの祠が祀られている

福増山　法念寺　（ふくますさんほうねんじ）　日蓮宗

所在地	市原市福増６１５番地
創建時期	延文５年（１３６０年）
本尊	不詳
住職	石川　央樹
由緒・伝説	本念寺の創立当時は天台宗のお寺として始まったが、文禄元年（１５９２年）に

福増山本念寺の本堂

下総野呂の本山妙興寺の善能院日圓上人が時の住職と法論を行い、日蓮宗に改宗した。
日圓上人は、幼い時より艱難をしのぎ、勤学の結果学問抜群にして論議朗詮の人で知られ、上人の教えに従って改宗する者は枚挙に暇がなかったと言われていた。上人は本念寺で余命を送り、独峡三昧に入り修行された。
その後、寛文年間（１６６１年～１６７０年）に住職となった第６世の本念院日弘上人も智慧の人と知られ、お寺の名前を「本念寺」として諸堂を整備するとともに、仏様の教えで多くの人を救った。

本堂内部・中央に本尊の釈迦像

本堂の正面と福増山の扁額

平和の鐘と鐘楼

慈母観音像が祀られている

歴代住職の眠る墓地

七福神の石像が祀られています

山倉　（やまくら）　神社・寺院・史跡・城址　　春日神社・若宮山仙蔵寺（真言宗豊山派）・円楽寺
山倉古墳群

江戸期は山倉村。地名の由来は、山田橋が山田郷の端であることから「やま（山田郷）・くら（崖）」で山田郷の崖地という意味か。

山倉　春日神社（かすがじんじゃ）

所在地　　市原市山倉字堂谷７６５番地
創建時期　　和銅２年（７０２年）に創建
祭神　　天兒屋根命
宮司　　早乙女　洋子
由緒・伝説　　旧指定村社。元は春日大明神。同和２年（７０９年）に創建された。明治４３年（１９１０年）に北野神社（字東辺田：菅原道真）を合祀、末社八坂神社（字天王：素戔嗚命）がある。

春日神社の本殿の社

春日神社の大鳥居と参道

大鳥居に掲げられる扁額

流れ造り瓦葺きの本殿

本殿前の駒犬と石燈篭

八坂神社の鳥居と参道

八坂神社の本殿の右側

若宮山仙蔵寺　（わかみやさんせんぞうじ）　真言宗豊山派

所在地　　市原市山倉１０６８番地

創建時期　　不詳ですが、江戸期には開山していた。

本尊　　不詳

住職　　川俣　育全

由緒・伝説　　不詳ですが、明暦の飢饉の際にはあったようで市原郡四国八十八か所霊場の 12 番札所になっています。平成 27 年に地蔵堂の落成法要を行った。

仙蔵寺の本堂の全景と燈篭

参道の階段と三門の標柱

本堂の入口には釣り鐘が

歴代住職が眠る墓地

円楽寺　（えんらくじ）　　天台宗

所在地　　市原市山倉 760 番地

創建時期、本尊等は不明で、現地には入り口の石の標柱があるのみで、廃寺と思われる。

山倉城跡　（やまくらじょうあと）

所在地　　市原市山倉字堂谷

築城時期　　戦国期と思われる。

築城主　　不詳

説明　　山倉城は、山倉キッズダムから南側６００ｍほどの山中にある。近くには春日神社がありこの辺りが城址と思われる。比高３０ｍほどの台地上ですが、集落から奥に入った山深い所にある。神社のある所は下の平場から１０ｍほど高い所にあり、ちょっとした居館などを築く程度の広さはある。また、その下の駐車場やＡの平場などは、完全に谷戸内部であり、かつての屋敷跡と思われる。一方、切通しを挟んでＡの台地には結構な平場となっていて、この手の谷戸式城館では、山上に遺構がない場合が多い。

春日神社北東側の尾根の堀切

春日神社の敷地の上に居館があった

山倉古墳群

遺跡所在地　　市原市山倉

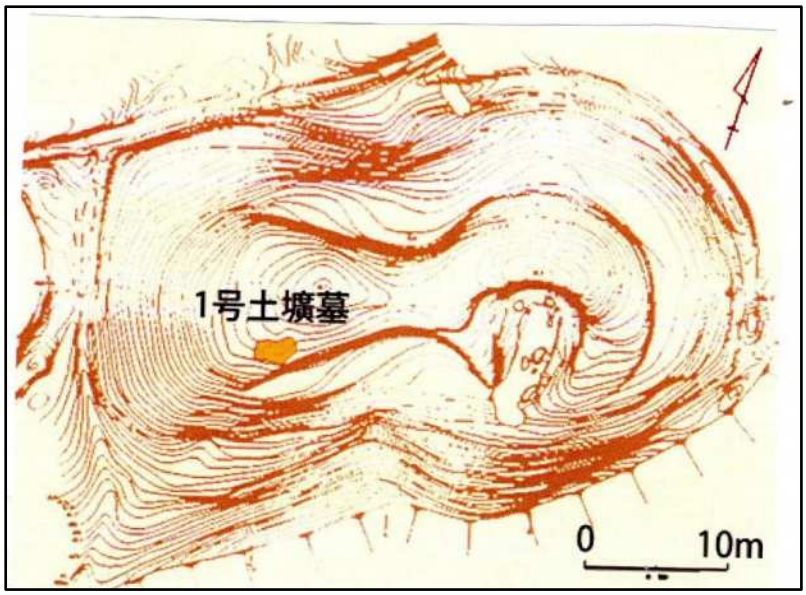
時代　　鎌倉時代～室町期

遺跡の立地　　山倉古墳群は、養老川の沖積平野を見渡せる台地の突端に展開する、６基構成の古墳群です。この内埼玉県生塚遺跡で生産された多数の円筒埴輪や人物埴輪が出土した前方後円墳は、「山倉一号墳」として知られ、有名です。しかもこの古墳は，鎌倉時代も聖地とされていた点でも重要な遺跡と言えます。

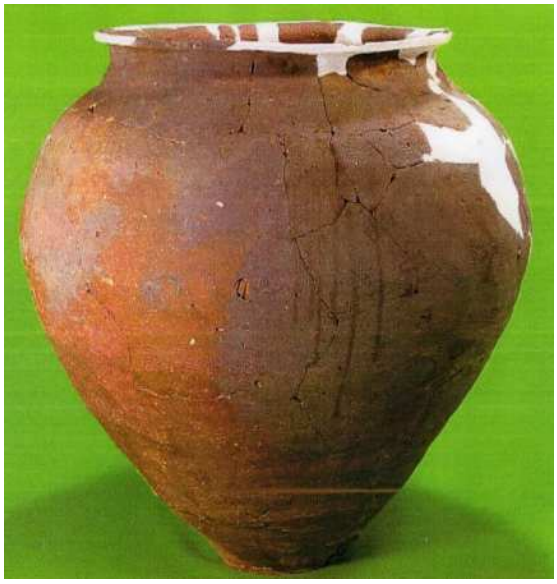
山倉古墳群のある台地縁は、開発地の最奥に位置することになります。平野を見下ろせる墳丘上に土墳墓が置かれたことから、「昔から存在する巨大マウンド」が村落の人々にとって特別な空間として認識されたものと考えられる。

１号土墳墓には、鎌倉時代の常滑大かめが蔵骨器として埋められていました。このほかに、鎌倉時代の常滑臺の破片も墳丘宇上から発見されており、葬送空間としてこれに関連した消費が想像できる。

１号墳では、室町期以降の遺物は認められないが、６号墳からは室町期の板碑と五輪塔が見つかっています。このような聖域的な空間は、台地の奥に移動していったと思われる。室町時代は、台地上の畑地化が進行した時期と捉えられるので、墓域の移動は台地開発の点から見ても興味深いものと思われる。



山倉１号墳墓の実測図



鎌倉時代の常滑大かめの蔵骨器

山倉１号墳の出土埴輪　左は形像埴輪と右は円筒埴輪

山倉１号墳群を北から望む。中央から左の前方後円墳が山倉１号墳上の道路は国道２９７号線で、養老川沖積平野に接する見晴らしの良い立地にある。

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
・全国遺跡報告総覧
・日本の城郭・城址（千葉県版）
・八百万の神
・市原市・宗教法人一覧
・かずさ国府はどこ？
・市原の城郭と国府跡をたずねて
・Wikipedia-　市原郡
・市原市歴史と文化財シリーズ

・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

三和地区の地名の由来と史跡と文化財

発行・編集　市原の歴史を知る会

住所　市原市能満 1020 番地 1

連絡先　０９０－３５４５－１１１３

・